

～ 平成27年産水稻概況と28年産対策 ～

発行:甲賀地域農業センター 防除班

○平成27年産 管内の水稻概況

5月は、晴れの日が多く、気温は平年並みからかなり高く推移したため、苗は順調に活着し、茎数は多くなりました。しかし、6月の気温は低く推移し、曇りや雨の日が多かったことから、葉いもちの発生は昨年より多く、ニカメイガや山間部のイネドロオイムシの発生は平年並みとなりました。

その後、草丈は平年並み、茎数は多くなりましたが、台風等の影響により一部で倒伏したほ場や不稔が見られました。また、穂いもちの感染に好適な気象条件が続いたため、7月23日に防除情報が発表されました。

斑点米カメムシ類の発生は平年並みでしたが、一部でアカスジカスミカメの発生が多くなりました。

なお、7月末から8月上旬は12日連続で高温注意情報が発表されるなど少雨多照となりましたが、8月中旬から9月上旬にかけて気温・日照時間ともに平年を下回り平年並みの登熟・収穫期となりました。穂数がやや多く1穂当たり粒数が平年並みとなったことから、全粒数は「平年並み」となりました。

10/15 現在、滋賀県の作況指数は100(平年並み、予想収量518kg/10a)となっています。

特に収量を下げるいもち病 28年産対策 (防除のポイント)

〔いもち病〕… 発生しやすい条件が揃わないようにすることが重要です。

① 葉いもち

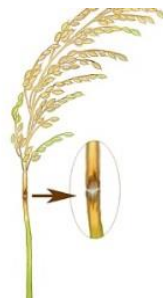
・箱施用剤を施用し初期防除に努めるとともに、置き苗で発生したいもち病が感染源になるので処分しましょう。
多肥田や晩植田で発生しやすく、品種では「コシヒカリ」、「秋の詩」、「滋賀羽二重糯」などが発生しやすい。



慢性型病斑 急性型病斑 褐点型病斑 発生直後の病斑 ずりこみ症状

② 穂いもち

・上位葉のいもち病斑が主な伝染源になることから、圃場をよく観察しましょう。高頻度で葉いもちを確認したら、穂ばらみ期～出穂期に防除しましょう。その際、周辺へのドリフト軽減のため粒剤やジャンボ剤をなるべく使用しましょう。



穂いもちの特徴

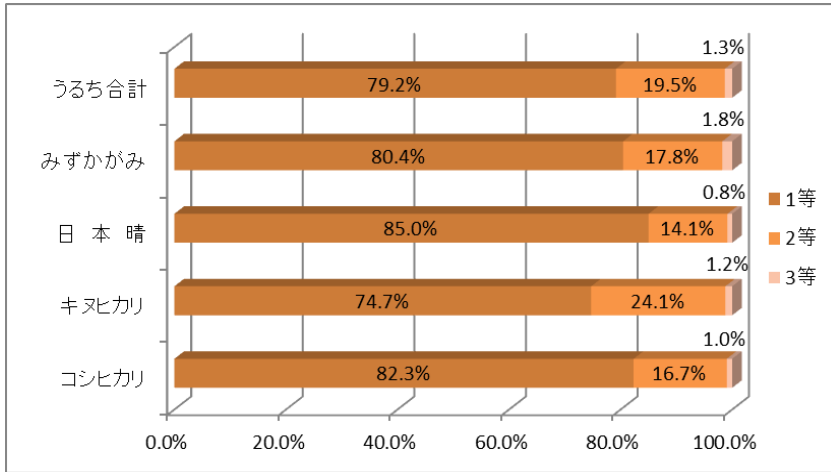
穂首の節や枝梗などに黒褐色の病斑ができ、そこより上部が枯死する。

(データ提供 県病害虫防除所)

※薬剤耐性菌の出現を防止のため、同一グループ薬剤の連用は避けましょう。

※いもち病の発生予測は「県病害虫防除所ホームページ」内 <http://www.pref.shiga.lg.jp/g/byogaichu/> 「水稻いもち病発生予測 BLASTAM (ブラスタム)」で確認できます。

○平成27年産 管内の水稻等級比率



◇平成27年産水稻生育の概況

		幼穂形成期	出穂期	成熟期
コシヒカリ	27年産	7月5日	7月29日	9月3日
	(平年値)	7月6日	7月29日	8月31日
秋の詩	27年産	7月17日	8月10日	9月21日
	(平年値)	7月18日	8月13日	9月20日

[2等以下に格付けされた主な理由]

未熟粒	37%
整粒不足	27%
着色粒 (カメムシ類)	12%
胴割粒	8%

カメムシ類による着色粒は防げる！！ 28年産対策（防除のポイント）

〔 斑点米カメムシ類 〕 … 畦畔、雑草地などのイネ科雑草で増殖をし、
稲の出穂期後に水田に侵入して穂を吸汁加害して斑点米を作る。



▲ホロハリカメムシ



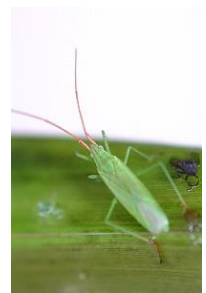
▲トゲシラホシカメムシ



▲クモハリカメムシ



▲アサジガカスミカメ

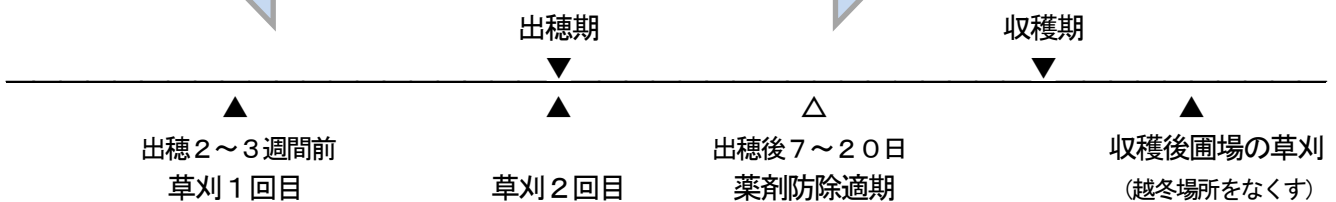


▲アカヒゲホソトドリアカスミカメ

<対策1> イネ科雑草をなくす。

- ・「イネ科雑草の穂を出させない」「地域で話し合い一斉に行く」ことをポイントに2回の畦畔草刈りを行いましょう。
- ・畦畔や雑草地は、カメムシ類の越冬場所になるので、収穫後にも次年の防除対策として除草を行いましょう。

出穂期前後6週間はカメムシを寄せ付けない



<対策2> 適期に正しく防除をする。

圃場周辺の畦畔や雑草地にアサジガカスミカメが多い場合は、乳熟期頃（出穂7～10日後）に薬剤を散布します。穂揃期に斑点米カメムシ類を確認した圃場は糊熟期頃（出穂16日後を中心とした出穂10～20日後の間）の防除が最も効果が高くなります。粒剤を使用する場合は、乳熟期頃（出穂7～10日後）に薬剤散布をします。いずれの薬剤も散布時期が適期でないと効果が劣るので注意しましょう。